

## 講演 【主イエス・キリストのあゆまれた最後の一週間】

● 高山右近さんや、細川ガラシアさんなど、400年前のキリシタン達が信じていたことについて、お話しさせていただきます！

毎年、春、四月ごろに、「受難週」（「聖週間」）と呼ばれる一週間が、めぐってきます。私たちの主イエス・キリストがあゆまれた最後の一週間を、深く心にきざみつけない「一週間」です。

この「受難週」の一週間があって、次の週の日曜日の「イースター」（復活節・復活祭）を、大きな喜びをもって、迎えられるのです。

どのような最後の一週間だったのか、主イエス・キリストの歩まれた御足（みあし）の跡を、たどってみたいと思います。

そのようすは、四つの福音書に記されていますが、必ずしも、出来事順に並べられているわけではありません。又、少しずつ記録の仕方が違いますので、はっきり、何曜日の出来事なのか、いいきれない部分もありますが、じっくり、聖書を開いて熟読するのは、それぞれ、ご自分でしていただくことにして、しばらくの時は、皆さんの心のスクリーンに、イエス・キリストの姿を、うつし出していただきたいと思います。

● 一日前の、「土曜日」から、見ていきたいと思います。

イエス・キリストと弟子たちは、過越（すぎこし）の祭りの六日前の土曜日、ベタニヤに来られます。ベタニヤは、エルサレムに近く、3kmほど離れた所にあります。

イエス・キリストは、ベタニヤの町の、シモンという人の家に滞在されます。

人々は、イエス・キリストのために、晩ごはんの用意をします。イエス・キリストが、死人の中からよみがえらせた、ラザロもいます。二人姉妹のうち、姉のマルタは、給仕していました。

妹のマリヤは、純粋で、非常に高価な、ナルドの香油（こうゆ）300グラムの入った石こうのつぼを持ってきて、そのつぼをわり、イエス・キリストの頭に、香油を注ぎます。そして、足に塗り、彼女の髪の毛で、イエス・キリストの足をぬぐいます。家は、香油のかおりで、いっぱいになります。

弟子たちは、これを見て、憤慨して言います。

「なぜ、この香油を300デナリに売って、貧しい人に施さなかったのか。」

「何のために、こんなむだなことをするのか。この香油なら高く売れて、貧乏な人たちに施しができたのに。」

彼らには、主イエス・キリストのためになされた行為が、“むだなこと”にしか、見えなかったのです。イエス・キリストを、埋葬するために用意をしていることが、霊の目が閉ざされていたので、見えなかったのです。

● 「日曜日」は、どんな一日だったのでしょうか。

イエス・キリストと弟子たちは、ベタニヤをたち、ベテパゲまで来ます。  
「向こうの村へ行きなさい。そうすると、すぐに、ろばがつながれていて、いっしょに、まだ、だれも乗ったことのない、ろばの子がつかないであるのに気がつくでしょう。それをほどもいて、わたしの所に連れて来なさい。もしだれかが、何か言ったら、『主が、お入用(いりよう)なのです。』と、言いなさい。そうすれば、すぐに渡してくれます。」

弟子たちは行って、ろばの子をイエス・キリストの所に引いていって、自分たちの上着を、その上にかけます。イエス・キリストは、それに乗られます。

大勢の人たちが、上着を道にしき、なつめやし(フェニックス)の木の枝を切って来て、道にしいて、イエス・キリストを出迎えます。

「ダビデの子に、ホサナ。祝福あれ。主の御名によって来られる方に、ホサナ。

天には平和。栄光は、いと高き所に。」

イエス・キリストは、エルサレムに着き、神の宮に入られます。そして、すべてを見て回られます。神の宮で、売り買いがなされ、「祈りの家」と呼ばれるはずの神の家が、まるで、“強盗の巣”になっている様子を、見て回られます。

この日は、時刻がもう遅かったので、ベタニヤに帰っていかれます。

● 「月曜日」は、どんな一日だったのでしょうか。

ベタニヤを出発して、エルサレムに着き、イエス・キリストは、神の宮に入り、宮の中で売り買いしている人々を追い出し、両替人の台や、鳩を売る者たちの腰かけを倒されます。

「わたしの家は、祈りの家でなければならない。」

「月曜日」から「水曜日」にかけて、イエス・キリストは、昼間は神の宮で人々に教え、夜はいつも、町の外に出て、オリーブ山で過ごされます。

イエス・キリストは、最後の日々、神の宮で人々といっしょにいて、多くのことを教え、福音を宣べ伝えられます。

ある人に、二人の息子がいました。その人は兄のところに来て、

「きょう、ぶどう園に行って、働いてくれ。」

といいました。兄は答えて、「行きます。お父さん。」と言ったが、行きませんでした。

それから、弟のところに来て、同じように言いました。ところが、弟は答えて、

「行きたくありません。」と言ったが、あとから悪かったと思って、出かけて行きました。二人の内、どちらが、父の願った通りにしたのですか。

招待される者は多いが、選ばれる者は少ないのです。

カイザルのものは、カイザルに返しなさい。そして、神のものは、神に返しなさい。

復活の時には、人はめとることも、とつぐこともなく、天の御使い(みつかい)たちのようです。

神は、死んだ者の神ではありません。生きている者の神です。

大切な第一の戒めは、  
「心を尽くし、思いを尽くし、知力を尽くして、あなたの神である主を愛せよ。」

第二の大切な戒めは、  
「あなたの隣り人を、自分と同じように、愛せよ。」  
この二つの戒めに、律法全体と預言者とがかかっているのです。

あなたがたのうちの、一番偉大な者は、あなたがたに仕える者でなければなりません。だれでも、自分を高くする者は低くされ、自分を低くする者は高くされます。

律法学者やパリサイ人が、あなたがたに言うことは、みな行ない、守りなさい。けれども、彼らの行ないをまねてはいけません。彼らは、言うことは言うが、実行しないからです。

まことに、あなたがたに告げます。この貧しいやもめは、献金箱に投げ入れていたどの人よりも、たくさん投げ入れました。レプタ銅貨を二つ。みなは、あり余る中から投げ入れたのに、この女の人は、乏しい中から、あるだけを全部、生活費の全部を投げ入れたからです。

まことに、まことに、あなたがたにつげます。一粒の麦が、もし地に落ちて死ななければ、それは一つのままです。しかし、もし死ねば、豊かな実を結びます。自分のいのちを愛する者は、それを失い、この世でそのいのちを憎む者は、それを保って、永遠のいのちに至るのです。

やみの中を歩く者は、自分がどこに行くのかわかりません。あなたがたに光がある間に、光の子どもとなるために、光を信じなさい。

この天地は滅びます。しかし、わたしのことは、決して滅びることがありません。ただし、その日、その時がいつであるかは、だれも知りません。天の御使いも、子である私も知りません。ただ、父なる神だけが知っておられます。

だから、目をさまし、注意していなさい。主人が不意に帰ってきた時、眠っているのを見られないようにしなさい。

わたしが、あなたがたに話していることは、すべての人に言っているのです。目をさましていなさい。

● 「木曜日」は、どんな日だったのでしょうか。

この日は、種なしパンの祝いの第一日目、即ち、過越(すぎこし)の小羊をほふる(屠る)日です。

イエス・キリストは、弟子たちに言われます。  
「あなたがたの知っているとおり、二日たつと、過越の祭りになります。人の子は、十字架につけられるために、引き渡されます。

過越の食事の用意をするために、都に入りなさい。そうすれば、水がめを運んでいる男の人に会うから、その人についていきなさい。そして、その人が入って行く家の主人に、

『弟子たちといっしょに、過越の食事をする。わたしの客間はどこか、と先生が言っておられる。』  
と言いなさい。すると、その主人が自分で、席が整って、用意のできた二階の広間を見せてくれます。そこで、私たちのための用意をしなさい。」

夕方になって、イエス・キリストは、十二弟子といっしょに、そこに来られます。

「わたしは、苦しみを受ける前に、あなたがたといっしょに、この過越の食事をするのを、どんなに望んでいたことか。

このパンを取って食べなさい。これは、あなたがたのために与える、わたしの体です。

この杯を取って、互いに分けて、飲みなさい。これは、わたしの契約の血です。罪を赦すために、多くの人のために流されるものです。」

イエス・キリストは、夕食の席から立ち上がって、上着を脱ぎ、手ぬぐいを取って腰にまとわれます。たらいに水を入れ、弟子たちの足を洗って、腰にまとっておられる手ぬぐいで、ふき始められます。

「わたしが、あなたがたに何をしたか、わかりますか。主であり、師であるこのわたしが、あなたがたの足を洗ったのですから、あなたがたもまた、互いに足を洗い合うべきです。」

「まことに、まことに、あなたがたに告げます。あなたがたのうちのひとりが、わたしを裏切ります。わたしが、パン切れを浸して与える者です。

ユダよ、あなたがしようとしていることを、今すぐしなさい。」

「あなたがたに、新しい戒めを与えましょう。あなたがたは、互いに愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも、互いに愛し合いなさい。

わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。わたしを通してでなければ、だれひとり、父のみもとに来ることはありません。

わたしは、まことのぶどうの木であり、わたしの父は、農夫です。わたしの枝で実を結ばないものはみな、父がそれを取り除き、実を結ぶものはみな、もっと多く実を結ぶために、刈り込みをなします。

あなたがたは、世にあっては、患難があります。しかし、勇敢でありなさい。わたしは、すでに、世に勝ったのです。」

それから、イエス・キリストは、賛美の歌をうたってから、弟子たちと共に、オリーブ山のふもとにある、ゲツセマネの園に来て、苦しみもだえながら、切に祈られます。汗が、血のしずくのように地に落ちています。御使いが、天から現れて、イエス・キリストを力づけます。弟子たちは、眠ってしまっています。

「誘惑に陥らないように、目をさまして、祈っていなさい。」

イエス・キリストを裏切ったユダに先導されて、剣や棒を手にした大勢の群衆がやってきます。イエス・キリストをとらえ、まず、大祭司のしゅうとアンナスの所、つづいて、大祭司カヤパの所へ、イエス・キリストを連れて行きます。弟子たちは皆、イエス・キリストを見捨てて、逃げてしまいます。

● 真夜中をすぎ、いよいよ「受難日」である、「金曜日」になります。「過越の備えの日」です。

真夜中のくらやみの中、群衆に引き連れて来られ、イエス・キリストは、大祭司カヤパの所にいます。夜が明けると、祭司长・律法学者や長老たちが集まって来て、サンヘドリンといわれる議会が開かれます。

大祭司カヤパが、イエス・キリストに言います。  
「私は、生ける神によって、あなたに命じます。あなたは、神の子キリストなのかどうか、その答えを言いなさい。」  
「あなたの言うとおりです。なお、あなたがたに言うておきますが、今からのち、人の子が、力ある方の右の座に着き、天の雲に乗って来るのを、あなたがたは見ることになります。」  
「神への冒瀆(ぼうとく)だ！ これでもまだ、証人が必要でしょうか。あなたがたは、今、神をけがす言葉を聞いたのです。どう考えますか。」  
「彼は死刑にあたる！」「死刑にあたる罪がある！」

この当時、ユダヤの国は、大帝国ローマの支配下にありましたから、罪に定め、死刑を執行するのは、ローマのユダヤ総督であったピラトの許可が必要です。  
イエス・キリストをしばって連れ出し、総督ピラトに引き渡します。ピラトによる審問が始まりますが、イエス・キリストは、ほとんど何も答えられません。

「あなたは、ユダヤ人の王ですか。」  
「あなたは、何をしたのですか。」  
「あなたは、王なのですか。」

ピラトは、官邸を取りまく群衆に言います。  
「あなたがたが、ユダヤ人の王と呼んでいる、あの人を私にどうせよというのか。」  
「十字架につけろ！」  
「あの人が、どんな悪いことをしたというのか。」  
「除け！ 除け！」  
「十字架につけろ！」「十字架につけろ！」「十字架につけろ！」「十字架につけろ！」  
「カイザルのほかに、私たちに王はありません！」  
「その者の血は、私たちや子どもたちの上に、かかってもいい！」

ピラトは、群衆の気げんをとり、イエス・キリストをむち打ちにした後、十字架につけるようにと、引き渡します。兵士たちは、イエス・キリストを連れて行き、紫の衣を着せ、いばらの冠を編んでかぶらせ、葦の棒で頭をたたき、顔を平手で打ち、つばをかけ、ひざまずいて拝んだりして嘲弄(ちょうろう)します。  
「ユダヤ人の王さま、ばんざい！」

いよいよ、イエス・キリストは、ご自分で、十字架を背負って、総督官邸から、処刑の場所、エルサレムの城へきの外にある、“どくろの地”(ヘブル語で「ゴルゴタ」、ラテン語で「カルバリ」といわれる場所に、出て行かれます。  
ほかに、二人の犯罪人が、イエス・キリストとともに死刑にされるために、引かれて行きます。

「どくろ」と呼ばれている所に来ると、イエス・キリストを真中にして、ほかの二人の者を両側にして、十字架につけます。  
「ユダヤ人の王、ナザレ人イエス」  
と、ヘブル語とラテン語とギリシャ語で書かれた罪状書きを、十字架の上に掲げます。

「神殿を打ちこわして、三日で建てる者よ。もし神の子なら、自分を救ってみろ！ 十字架から降りてこい！」  
「彼は他人を救ったが、自分は救えない。イスラエルの王さまなら、今、十字架から降りてもらおうか。そうしたら、われわれは信じるから！」

「彼は、神によりたのんではいる。もし神のお気に入りなら、いま救っていただくがいい！『わたしは神の子だ。』と、言っているのだから。」

イエス・キリストは、十字架上で、七つの言葉を語られますが、第一のことばをかたられます。『父よ、彼らをお赦し下さい。彼らは、何をしているのか、自分でわからないのです。』

兵士たちは、イエス・キリストの着物を分け、下着は、上から全部一つに織った、ぬい目なしのものだったので、一人にあたるように、くじをひきます。

十字架にかけられていた犯罪人の一人が、悔い改めて、主イエス・キリストを信じます。「イエスさま、あなたが御国(みくに)の位にお着きになる時には、私を思い出して下さい。」

イエス・キリストの、十字架上での第二のことば  
『まことに、あなたにつげます。あなたは、きょう、わたしとともに、パラダイス(天国)にいます。』

イエス・キリストの十字架のそばには、イエス・キリストの母マリヤと、マリヤの姉妹と、クロパの妻と、マグダラのマリヤが立っています。

イエス・キリストの、十字架上での第三のことば。母マリヤと、そばに立っている愛する弟子ヨハネに対して、  
『そこに、あなたの息子がいます。』『そこに、あなたの母がいます。』

時刻は、十二時ごろになります。全地が暗くなって、三時ごろまで続きます。太陽は、光を失ってしまいます。

三時ごろ、イエス・キリストは大声で、十字架上での第四のことばを叫ばれます。  
『エリ、エリ、レマ、サバクタニ。わが神、わが神、どうしてわたしを、お見捨てになったのですか。』

イエス・キリストは、すべてのことが完了したのを知られます。十字架上での第五のことば  
『わたしは渇く。』

イエス・キリストは、さしだされた酸っぱいぶどう酒を受けられ、十字架上での第六のことばを語られます。  
『完了した。』

そして、大声で叫ばれます。十字架上での第七のことば  
『父よ、わが霊を御手(みて)にゆだねます。』  
こう叫んで、息を引き取られます。

神殿の幕が、上から下まで真二つに裂けます。

そして、地が揺れ動き、岩が裂け、墓が開いて、眠っていた多くの聖徒たちの体が、生き返ります。

兵士の一人が、イエス・キリストのわき腹を槍で突きさします。血と水が、流れ出て来ます。

イエス・キリストの弟子でしたが、ユダヤ人を恐れて、そのことをかくしていたアリマタヤのヨセフという議員が、ピラトの許可を得て、イエス・キリストの体を取り降ろします。

ニコデモも、没薬(もつやく)とアロエをまぜ合わせた物を持って、やって来ます。

亜麻布(あまぬの)で巻き、すぐそばの園の、岩にほられた新しい墓に、イエス・キリストを葬ります。墓の入口には、石をころがしかけておきます。

● 「土曜日」は、どんな日だったのでしょうか。

この日は、安息日(あんそくにち)。それも、大いなる日。過越の祝いがなされた日です。人々は、過越の食事をして祝いましたが、イエス・キリストは、過越の小羊として、肉をさき、血を流され、生命を捨て、陰府(よみ)に下られたのです。

そして、三日目、次週の日曜日に、イエス・キリストは、罪のあがないのわざをなし終え、死に勝利して、よみがえられるのです。「イースター」、復活節・復活祭です。

以上、私たちの主イエス・キリストが歩まれた、最後の一週間を、聖書のみことばを通してたどってきました。

今、改めて、イエス・キリストの十字架上での、第四のことばに目を向けてみましょう。

マタイの福音書 27章46節

イエス・キリストは、大声で叫ばれました。

『エリ、エリ、レマ、サバクタニ。

わが神、わが神、どうしてわたしを、お見捨てになったのですか。』

子なる神であられるお方が、神が人となられたイエス・キリストが、どうして、父なる神から、神でないかの如く、見捨てられるというおそろしいことが、なされなければならなかったのでしょうか。

この「受難週」の一週間、一つ一つの苦難をどうして、味わわなければならなかったのでしょうか。

人々からさげすまれ、のけ者にされ、人が顔をそむけるほどさげすまれ、尊ばれず、罰せられ、打たれ、苦しめられ、刺し通され、砕かれていかれたのです。

「わが神、わが神、どうしてわたしを、お見捨てになったのですか。」

主よ、私のためです！

私のために、いのちを捨て、罪過のためのいけにえとなって下さったのです。

私が、本来、十字架の刑をうけ、打たれ、刺し通され、砕かれなければならなかったのです。

十字架上で悔い改めて、主を信じたあの犯罪人と同じように、私たちも、祈りたいものです。

「主イエスさま、父なる神さまが、あなたをお見捨てになられたのは、この私のためです。

イエスさま、あなたが御国の位にお着きになっておられるこの時、私を思い出して下さい。」

イエス・キリストの愛にみちた、やさしい御声(みこえ)が、聞こえてこないでしょうか。

「まことに、あなたに告げます。あなたは、きょう、そして、いつまでも、わたしとともにパラダイス(天国)にいます。」 アーメン

お祈りしましょう。